詞のたまのを

二

ホ 2
143
2

門 利 水 2
號 143
巻 2

同攻會印

詞瓊綸二之巻

はもより上へかゝるてにをは

（は）

古八　よそにのみこひやわたらん しら山のゆきみるべくもあらぬ我身（は）

同十二　序　あづさ弓ひけば本末我かたによるこそまされ 恋のこゝろ（は）

同二十　あふみより朝たちくればうねの野にたづぞ鳴なるあけぬ 此夜（は）

後十　ともかくもいふ言の葉のみえぬかないづらハ 露のかゝりどころ（は）

後拾四　いきやらで 川瀬の霧はしもしくにたち方人の袖のみゆる（は）

拾十六　春はみなみるらくなれどあかりき よに家せき人のあはれに。（は）

古五　ちはやぶる神代もきかず 立田川からくれなゐに水くゝると。（は）

同十八
思ひきや鄙のわかれにおとろへてあまのなはたきいさりせんとは。 そ

ぞ

古二
のこりなくちるぞめでたき桜花ありて世の中はてのうければ ぞ

同六
山里は冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬと思へば ぞ

同十一
かりこもの思ひみだれて我こふと妹しるらめや人しつげずは ぞ

同十二
おろかなる涙ぞ袖に玉はなす我はせきあへずたぎつせなれば ぞ

此歌の意は涙をせきかへで激つ瀬なればそこにふかうかへりぞ袖に玉みるほどをおろかなるなどぞといへるなり

後五
秋萩を色どる風はふきぬとも心はかれじ草葉ならねば ぞ

後拾五
いかにせん山のはにだにとまらで心のそらに出ん月をば ぞ

をばといふあり。ハ上へつゞかざる格なり。三の巻のぞの所に出せり。

も

拾十八
しばらくゆきてかへらん あふことはちかの里はまちみたらし も

同八
大井川河瀬は杏に?あらねども かくばかりふみゆきやらじ むかしも も

後拾六
木葉ちる宿はきゝわくことぞなき時雨する夜も時雨せぬ夜も も

金八
ちらさじや かのひらふの山ざくら あかぬひまさのきをもとめづる も

新六
冬枯のあさまへまがふ時雨と思ひしをたへざりける花乃泉 も

後十五
行しぐれ山もおひぬる しかの山 人を待木かゝるこ。 も

新十七
たくやかはこぞの衣 ゆくべしよ いづこか家のおきまさること。 も

同四
秋来てわがのきはそ思へ 露ぞ萩の上ふく風につけて。 も

後拾十
とはれまんたゞうきを 涙川 おもひやるらん こぞのよふ也。 も

同九 おぼつかな。みやこのそらやいかならん」こよひあかしの月をみるに［も］

［を］

古一 たれしかもとめておりつる」春がすみたちかくすらん山のさくら［を］

後十一 こゑたえよ」人もすさめぬこひをして秋を鳴虫なれるもぞ［を］

拾十二 しるやきみ。しらずバいかにつらからん」わがかくバかりおもふこゝろ［を］

金七 よしさらにむかしのこともかたらんせバや」人に」よハのきゝき［を］

ものをといふ詞ハ。おほくハ上へかへれど。又物をのことも
おなじ。此をハ別に五の巻にくはしく出せり

［に］

古二 花のいろハうつりにけりないたづらに」わがみよにふるながめせしま［に］

同四 春霞かすみていにし雁がねハ今ぞなくなる」秋霧のうへ［に］

同十五 それをだにおもふこととてわがやどを見きとないひそ」人のきかく［に］

拾十二 なき名のミたつ田」の山乃あをつゞら。又くる人もみえぬところ［に］

此うたハ。又くる人もみえぬところに。なき名のたつ田といふことあるを。くるの縁
よりつゞらをいへるぞ。たつたの山のといひかけるなり

後拾十八 ねぬなくもねぬ名のつく立ぬとば猶おほさゝのいきしや」よ［に］

同 ひきうけつ」たかとものむまを住吉の神さびにける松乃こずゑ［に］

かやうなるしに　なにこれらハおほくハかつぞ

［て］

古二 此里にたびねしぬべし」さくら花ちりのまがひにいへぢわすれ［て］

同十七 わがこゝろなぐさめかねつ」さらしなやをばすて山にてる月を見［て］

旧十一 夕ぐれは雲のはたてに物ぞ思ふ　あまつ空なる人をこふとて　[て]

新十八 あかつきの秋のねざめのさきよとも忘れぞいのる　身を思ふとて　[て]

拾八 きゝしかるね夜やさしたのびぬらん　をりはへぶかきむしのねに。[て]

合三 萬代にしるしを見るべき　たなびくさの松が枝の雲のうへにて。[て]

新十七 世の中はちりぐ/\といふなれば　ありしは烟を身のおもひにて。[て]

古六 あすか川淵はかりなく　昨日の月しづまでのかずをたてぬきにして。[て]

後十五 なにせんにへさのころめをおもひけむ　おきつ玉もをかづくみにして。[て]

旧十八 かりもきてしらねの山はふたぎけむ　何かうらみん　多く都へして。[て]

拾二 ことふえば玉はうてるもあかりけむ　おやこの身のいよりのをしにて。[て]

詞三 夕ぐれにこもる心もみえしかど　みな川せ山へみのゆめのたびらうしにて。[て]

ぶての夢になりて。上へつゞきて下にきふくみて。つひきてそ
字をも引かり。次にかけて

古十五 月やあらぬ春やむかしの春ならぬ　我身ひとつはもとの身にして。[て]

同 うちみてもなにてもいふかひなき鏡にうつる親のおもかげにて。[て]

旧十九 けふきのふといかゞかるべきはいでやこゝろをたゆむなにて。[て]

新勅一 いせのあまは朝な夕なにかづくてふ　うらびの貝はうらさおもひして。（よりて方）[て]

玉四 ありふとも秋すしなれば夜は月ばかり　あふよしなくもまつことちして。[て]

風十六 まだ宿をはなれぬもゆく　はるがはの志ぞく　なほ頼ぞかりして。[て]

[で]

古十 いまはとてわが身時雨にふりぬれば　ことのはさへにうつろひにけり　まちまたれせで　[で]

新一 むかしのみながめてちりぬ」梅花をるぞかをれる人をこひしこ で

文上へかかつらひたるをふくめて でと結びたるハ

千十五 わすれても取見まほしき玉づさをみぐるしむだらにもおかせ で

と

古一 うぐひすの笠にぬふてふ梅の花をりてかざさん」老かくるや と。

同九 なにしおはばいざこととはん」みやこどりわが思ふ人ハありやなしや と。

同十七 かゞみ山いざたちよりて見てゆかん」年へぬる身ハおいやしぬる と

拾六 たよりあらばいかでみやこへつげやらん」けふ白川乃関ハこえぬ と

同十八 はるかなる人ハ人にかゝらん」まき人の袖かりて一夜ねすき と

後拾一 ふるさとへゆく人あらばことつてん」けふうぐひすの初音きゝつ と

ど

古四 月見ればちゞにものこそかなしけれ」わが身ひとつの秋にハあらね ど

後拾二 とし波へて花こそかむをなぐさむれ」ましはなるきハなかりけ ど

ども

後十五 濱千鳥かひなかりけり」つれもなき人のあたりハなきわたれ ども

新十八 世をそむくこゝろは猶ぞなかりける」うきをしりしとハおもひしか ども

とも

古四 萩が花ちるらん小野の露霜にぬれてをゆかん」さよハふく とも

同七 君が代ハかぎりもあらじ」長濱の真砂のかずハよみつく とも

べく

古八 山風にさくらふきまきみだれなん＝花のまぎれに君とまる べく

同六 花の色は雪にまじりて見えずとも＝香をだににほへ人のしる べく

まで

拾八 わするなよほどは雲ゐになりぬとも＝空ゆく月のめぐりあふ まで

同十二 思ふ事なく名残し出ぬる＝いかでちひさき梅や見し人にとふ まで

又上へかゝりつゞきて下にはかゝらずしてまでとむすびたるハ

古七 わが君は千代に八千代にさゞれいしの＝いはほとなりて苔のむす まで

千六 冬来ては一よ二よを玉ざゝの＝葉わけの霜のところせき まで

ながら

古五 ゆくさてさしもやとりけん＝もみぢのちりてせしなく ながら

千十九 おぼろけの月かはあはれそらくもれ＝よるなき君をバ夢と見ん ながら

ものから

古三 ほとゝぎすながなく里のあまたあれバ＝なほうとまれぬ思ふ ものから

同十五 あまぐものよそにも人のなりゆくか＝さすがに目には見ゆる ものから

ものゆゑ

同四 秋ならであふことかたき女郎花＝天の川原におひぬ ものゆゑ

同十一 恋もしぬ名もたゞ我身をあはれともたぬまを＝きりそて人よそハぬ ものゆゑ

まに〱

同八 わかれをバ山のさくらにまかせてん＝とめむとめじハ花の まに〱

同九 このたびハぬさもとりあへず手向山＝紅葉の錦神の まに〱

猶上へかゝる留りの格ハ右にしるしたるをもおもひ准へしるべし

○もとへかへしてにをはの辞まで留りて。上へかゝる言のあるハ。いづれをもみな
その留りのてにをはをとりかへし。上の詞の切るゝ所へとかへるやうによむ
ことゝしるべし。いづれもかゝるところを考ふべし。但し「の点より「のしるしまで
へかへり。「ハ詞の切るゝところを示すしるし。猶くはしくハ附格をしるして
留りのてにをはの或ハ独立の詞などへのかゝりて。ハ詞の切るゝ所へ
をかへらるゝおよそむかしの事ハみなむかふとし。されど先の詞へもかゝらぬを雖
ようもあれど。切るゝ所までへかゝらざれど。一首の趣きのかはりをしるべし。

詞かへてよむてにをはの格

[も][と]と[ぞ][の][や][何][こそ]とかゝるてにをはあり。そのうち[も][と]ハ
猶く。[ぞ][の][や][何][こそ]を詞かへたるの格によりて結ぶべし。

古四 おく山にもみぢふみわけ鳴鹿の声きく時[ぞ]秋はかな[しき]。

同二 さくら花とくちりぬともおもほえず人のこゝろ[ぞ]風も吹あへ[ぬ]。

後拾一 逢坂の関をや春もこえつらんおとはの山[の]けさはかす[める]

古六 みよし野の山の白雪ふみわけて入にし人[の]おとづれもせ[ぬ]

同二 ちるをなべくいづこにかゆかんあとなきを花とのみ[こそ]花ぞちる[らめ]

同十九 人をおもふこゝろは木の葉にあらばこそ風のまにまにちりもみだれ[め]

[や][何]なども是に准へてこゝろ得べし

ぞやなにこそ ハかゝりにひゞきある例なし 此中にやと何とハ言とはいはで一つの格なり さてこそハ此の書やの終りなる

のもや、たゞきにぞ や 何 こそ と言へるを結びし こそ よ言へなる

なきハ こそ の格にし結ぶ

後十一 はの雲路をあふぎたまくまきしみ こそ を見たく火の下にあが る

などのめしふぞや三の巻のの終りしくわしくいへり

○二言かはるのなるてふなき

ぞ と や と

ぞ と 何 と

後十一 おのつ見そし行くぞとかれし後をぞ思ふやよみしど人の名ぞむる

拾云 いのちをぞいつまでかんとハ思ひこし いきてあるしよふこそるれ

ぞ と こそ と

新宮六 後村上院 新たなる春秋の月ぞ秋をまちて時こそあきとさやけかる

新六八 うきぐされ人のそむくにうかび出てあらばや たまとをもちづむ べき

や と 何 と

こそ と や と

伊勢集 花をこそ人やをるとてとがめしか 散るかぬ君をいかゞさせん

右の歌ハ二字かはるのへかゝりてふきはなし「 」の様し

きゝえてはいふべし

紫式部続集著 ゆるはやてを思ひ後の月影ぞむかしもえきどおもひやる 心く

これと同じく二字なる

變格

これハ上よりぞのや何かの辞をおかくして。ぬるつるありけるせるらんぬね志るなどうけて。定まる格をもつゞかず。かゝらでぬとも不調とハ見しぬべきを。今かりに變格となづけて。こゝに出せり。

ぬる

後一　ふる雪はみのしろごろもうちきつゝ春きにけりとおどろかれぬる

同十六　數ならぬ身を宗捨てよし世山にはなげきをおひこりぬる

拾十一　みをいづる方はをぶみのいろなハかなしき物と思ひしりぬる

同十六　春ぶのゑをさぎやをてつる｜うぐひすのまつ川に寄せでなきぬる

千三　こゝ夜は花と見すまで秋風をま川の浪まてさゆるハ。くれぬる

同八　冬来ぬといづきは松をかれふて難波乃うら波あれざりぬる

新八　またしよふ忘りしと見でハなかりしをしられとがらひてやゝぬる

同十一　あるはかるみる花を波てまゞ川ゝ名草は浪をわかるびぬる

同十二　みるめこそ入ぬるいその草ならめ袖さへ波の下にくちぬる

同十八　うれしづゝ志山よハさてもいかぞとんまらひてこそへうらぬる

同　ちゝのや月いとはしげみでのかきをちらを見るるふ猪まよひぬる

同　うき身には山田のおしねおしこめて世をひたすらにうらみわびぬる

つる

拾十七　かしはするつくまは神のつゞぐと我身にわゝにあるを浪みつる

後拾遺七 見ぬ人にのこさばうつし植て麻の手よきらぬ世べしなし つる

同七 八重葎しげれる宿をおきすてて九重までうつろひし つる

同九 霜の風にふかぬ日の此花もけふしる杜の木の葉ちらしきて つる

千五 はてかみや右ひとつ行の山おろしにお葉も海乃梅とすし つる

同六 やまさとはましろのしら浪打よせてうきのさぶちをとり葉し つる

新九 すみぐしと君がすくべき袖しほをなやしやとめる袖ふりを つる

なる

古十五 ならふあひて袖おりふるのとが袖ふやどる月さへ濡るゝがほ なる

玉十 定家卿 こひわびて兼ておもへる夕暮をまつれど人のつらきがほ なる

ける

後拾遺八 春は花秋は月にと契りつゝ今日を別れとおもはざりける ける

新十七 住人の家居をさえぬ浪の音おもひもよらで宿をかりける ける

後拾遺十三 定家卿 ちかしなよひと行かりにゆるしけんつきせぬ恋で人をこひける ける

せる

後十五 むかしの山路をくだり夫てこの末ござる心をちぎりて せる

哀し

詞八 おのれやなみだ玉乃をかくらん 世の中に絶てみざる 哀し

新五 秋のよ八ながや出月をしありあけがたや 篠原せる 哀し

ぬ

源氏 いかにしへを咲つゝ苗行きしさへづるもの青さへかちる ぬ

新十五 うちはへてあきの夜神にさためて君が思ふ人ぞおもひつゝもせ ぬ

旧十七 春の日のながらの浜に船とめていづれか橋ととへどこたへ ぬ

上件のうたどもいづれも皆疑ひの首に疑ひのことばありて。留りの

下にぬ文字よりもといふ辞を加へて心得べし。この類ひ定まれる

おもく。ぬ。つ。なりけり。せぬ。ふぞ。など。結びては。ひろくありてよろ

しかれども。よく味ひはかるべし。

源氏 若菜上 いりせ山ふかれぞとみば君にだてあぐえの袖にぬるゝまどひ のる

此うたにつきても詞によしといへるものなりとはゞかりぬるまどへ

のるよしといふことあれども。先にて一首も准へ考ふべし。

後撰 三 いかなれば春くる日の袖もしらぬ我がいつかのかげもなり つる

此うたは上よりのとあればかく変格にはなれるなり。つるの下へものをといふ辞を

くはへて心得べし。

新後撰八 津守国基 くるゝまでは見ひさしきまん。いつ方は川いそぐ波かに船をかし つる

後撰一 よしぬるも家をすてしやは。ちるもとのもとの袖に花てかて 了

此二首はうたの下へをといふ辞を加へて上へかへる意也。

○さて変格は。本の格ちくなる味のあるもあて。その味をしらずよ

くさるゝ変格の上にてひろいと稀なることにて。八代集は

中にもすぐれて。三十首にみたず。八代集の歌の作者にはことの変格のたぐひ

ありわきてみづからはよむまじきことを知べし。猶ゝこれは後世にこそ。

てにをはの定まれる格あることをしらずしてねたまし。まして右の味などを

たゞ語をとられてはかりて。此変格のあるびあるをみだりによみて

と知りぬらんあるらん人を思ふ答きたるらん。

○又一くさ

後十一 いにしへをたのみこめて有かひを人にしらする答ぞ | あふ | あつし

同十二 おもひ出て答づるしる山桜の花にこりぬるころ | あふ | あつし

〇〇の日記 清ぎ見ましきえうつる答よりも見ぞのめでたる見八 | あふ | あつし

同 たく山の見ひや見ぶふらし秋ふましく何石春のかくる | あふ | あつし

うつほ 菊宴 一よぶふ久してふなる何しと川のまふくえ出る月 | あふ | あつし

同 かゝるをたちなほしてしる答の袖こえりつるこよひ | あふ | あつし

同 玉の むら 清く玉緒の峯までうく清白を秋ぶもよそふえる八 | あふ | あつし

後十一 秋ふぶ川 なげきを称ぎ見もゆる梅まぢふむりの春や。 | あふ | あつし ろイ

拾十七 夢く 梅をみなまちうしろそ清くすのをきす川浪もなきこ気や。 | あふ | あつし ろイ

同十八 かくちろもたつよりなるみなおとで気袖なりとすのや。 | あふ | あつし ろイ

後拾十一 うれしきよ繊まずる人をみるとを清くきをこゆる気や。 | あふ | あつし ろイ

同 次戸の何みお浦こで秋のあさをなくえぬ人なる我や。 | あふ | あつし ろイ

詞十 宮の人を月にまさやふさえ浅きまことぞこえる梅や。 | あふ | あつし ろイ

六帖 うらしなく秋ぎふる秋乃てる月ゆくを思りとまれる気や。 | あふ | あつし

同 清みより番秋の中なれ秋さびしきハいとぞ嵐の風や。 | あふ | あつし

狭衣 日記 いふよりきくぞうすし紀島のよふゆるさるの人や。 | あふ | あつし

うつほ 祭の使 久されだまろねなる身秋さびしきふ明らむ心の都や。 | あふ | あつし

同 玉かづら 何をとのそえ出る秋ざ見のつびきふ独あるところの美や。 | あふ | あつし

風六 いろかへぬ松と あやふ あやし ＝萬代にしらぬをふくむふ花もさだまらで

六帖 よの人乃いきけるものをこげくさをふあやしといそぬハ たま がうき あるらむ

源氏 おきてゆくそらも志らぬ所の いづく の露のかくふぞで あるらむ

後七 えこうふるあらじふなるくこが袖と秋の紅葉と いづれ まさ れる ろイ

同九 くやくとまり夕暮とかハぞてうるけれど いづれ まさ れる ろイ

後拾十又 つりよ秋月とこが身秋り来との おぼつかなさを と いづれ まさ れる ろイ

同三 まちげきのまちつる秋のさびしさと何ぞまされど いづれ まさ れる

躬恒集 うつべうんこがちろとでも秋萩の花の色とハ いづれ まさ れる

好忠集 夜もすがら乃麻秋をさびしきと何ぞ人の心がなさと いづれ まさ れる

赤染集 秋をていづくハさうり秋のみちぞとこうろ若葉と いづれ まさ れる

萬葉第十 ふるゆきのむらぎのうへにふる雪は花のまがふに 六帖 いづれ たが へる

土佐日記 黒髪の雪と磯べの白波と いづれ まさ れり ＝おきつ島もり 又あふ まさるとしも日記

拾遺 八百日ゆく濱のまさごと君が世と いづれ まさ れり ＝おきつ島もり

右の件の歌ども。あふいづれなどいへれバ。なるまるなどと結ぶべき定まりなれば。或といへるで。とゝ結ぶるハ。いとくまづしき結びなれバいづれの本なと皆或とあるなもまたなり。又一本にハ。一本にハ或なとといへりこれを思へば或と有るが正しきなりといふべけれど。或とある本ハ猶おもくみて。これなるがおもし。又萬葉乃集なるハ。たしかに其字まで里の字をしるしたれど。或とあるハ中くにむがしくかしての右の哥どもを

考へわたるべし。哥よミ出るハ必撰集也。撰集ならねど。みな家集とのミ思ふ也。
こま代りて思ふに。撰集ハよく外人さかしらを加へたり。後ニ家ニ改めつる事の
ありて。かの集にも。人の手を入ざる也。□つきあるてしうとがひあるし。一つ
あらくにはのまゝ見て傳ハ見る事。
の要格也。此格ハ。右の中に後撰集と源氏物語との事をのせて。右の人
のうたがふする也なり。殊に諸言をおほく引出せり。

文

新千十四 哀傷　うのかのうきみがくれにはそぎすてゞ見びぬと いづれ やどへ ぬ
拾遺 雑下 仲正　あらたま川瀬のうちよの岩の苔ぞが袖のうへに いづれ 流も当 し
こまかにといづれといへれバ。猶へなる事なきとしてそいふべきなり。
ぬと結び。しと結ぶハ。上の件と同じ格也。
○又一ツ
今二　夜のよは月まつほどの手すさびに思ひつゞけて いく むすびし つ

新六　夜かは音をまくらにきゝかはすや伏見の菱を いく よのとし つ
同九　みやこをば秋とともにぞ立ちそめし淀の川霧 いく よへだて つ
新勅一 式子内親王　高砂の尾上のさくら尋ぬればみやこの錦 いく へかすみ ぬ
金四　淡路しまかよふ千鳥の鳴声に いく よねざめ ぬ 須磨の関守
新四　しもがれし浅茅が原の露の袖 いく 秋かき つ 露わけづき
同七　年ふれる宇治の橋守こととはん いく よになり ぬ 水のみなかみ
後撰 恋　思ひ出しあるらんとおもひしに いく かへりける ぬ うきは川波
玉葉 羇旅　船出して いく かになり ぬ 春のきて山の名ぞうかりけるかぞへきにける
新二　いく とせか花に心をつくしき ぬ わが身と思へみよしのゝ花
同十四　いく めぐり空ゆく月もへだてき ぬ 契りし中はよその浮雲

右のうたどもいくといへバ。つるぬると結ぶべき格なる所。つと
むすび。ぬと結べること。上のなるまでと同じさまの変格なり。
此格を後世歌よみおほくよみあやまれり。又

千載集　されバちて萩の下葉も色づきぬおくまで秋ハいづくまで来ぬ

これも上と同じ格なり

本末に譲る格

これハや何ぞ結びてふをそをおきて。ぞ結び辞をだ。本末をしゆづりてはぶける格也。

新一　梅の花たが袖ふれしにほひぞと春やむかしの月にとはゞや

同十二　面影のかすめる月ぞやどりける春やむかしの袖の涙に

此二首ハ月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身ひとつハもとの身にしてといふ本歌の一首の意を春やむかしといふ詞にこめてのこしたるのみにてそのことわりをいへるにて。やの結びをバ本歌にゆづりてはぶけるなり

同十八　君が代ハいつまでとかバなにか玉の緒乃長くとまでハをしまれしころを。

これハ君が代を一つにあるにもあらず。かきていはずバ何を玉の緒をなにせんといふを本歌にて。君が代をいつまでといはバ何を玉の緒のながくとまでをしまんといふこゝろ。是も本歌の結びをバ本歌にゆづりて。本歌の結のことをふくみて。のとあるにて上と同じ

後撰古今集　おのづからいふ頼しよの夢絶てはかなき人ハそれ月ハえせけれ

これも古今集一よひくに極まざめんとこそあらしいふ頼しよる夜にえしをもといふを本歌にて。其二の句もその一首の意をこめていふの結びをも本歌にゆづりてのとあるこゝも上の歌たしかなり

後撰二 定文
しひてなを袖ぬらせとや△春のなむ春を[いく]かのあるじなるらん△

こは古今春下「ねてまて」ぞしひてまゐる年の内に春はいくかもあらじと思へばといふ歌をとりて本歌のことばをとりて、いくかといへる詞にこたへてめでたし。本歌にいくかとあればこそいくかともいへれ。いくのてにをはハいとどのつるを。今は本歌によりてとゞめのらんをばらんといひておさめたるなり。いくのてにをはとのあはしき。
の歌二の句のやの結びなり。いくの結びにはなれ。
よくせずばまぎれぬべし

新後撰十三 順徳院
いのち[やは]あだなる露の草まくらそれだに惜しからぬ身を

こは古今恋二いのちやはなにぞは露のあだものをあふにしかへば惜しからなくにとある本歌によりてよませ給へるにて、本歌のいのちやはといふ詞をばゆづりて、そのことをはぶきてよせの詞をしらせたまへるなり

○右のやうに本歌に出づる詞は其の本歌をしらではてにをはのかなはぬやうにきこゆべし。又今おのが人のよむべき歌などにはいかでかよくせずばいかにかなはぬことのあるべし。

てにをは不調歌 此一代集の内をもとゝす。撰集の外ハあまた/\あれど ここハもらしつ。

[き]

古 十
ほとゝぎす峯の雲にやまじりにし[ありとはきけど見るよしもな]き
上のやもぞのや何なれてにをハなくしてきと留めたるハ八代集の中にこれ一首のみなるべし

新勅 十八
ねざめふるつらさにこりぞ光おきて露のゆふかげむすびしのまとるき

玉 二
いかにせん見ぬよのやまざくらまちてちりなむともにあはてぬへき

同 十
ちぎりしをよそにしもきくれまねくはゆふぐれまでもはてしはなしにたのむなき

同 十二
人やりのみちかちやまやれきまさるそなたとまもろでつゆぞふるき

同 十七
ゆきぐ河もなるゝも同じ夢路よりさめて驚くさへそかねき

風二　何となき草の花さく野べの春雲にひばりの声ものどけ【き】

同十三　かはりゆく人の心の色やなに『うらみんとすれどそのふしもな【き】

同十七　人乃世をぞ久しとおもふも一とせの夏のうちにもうつりはてな【き】

新六　冬の来て山もあらはに木の葉ふり残る松さへ峯にさび【しき】

此歌ハ新古今の中にもめづらしきさまなり。そのさまを案ずるに上の句のおもき所をやはらかにいへり。殊に上の句もよろしくはてにおはのてのはじめよりもなるべし。上下そのや何かの辞なくて。しきと留めたるハ八代集の中にも此一首のみなり。其後の十三代集にも。玉葉風雅などのほかにはあまた見えず。一首二首見えしのみ。

【しき】

玉三　夏山乃岩が根きよくおち落て行くる水の草のいろぞすゞ【しき】

同　吹風の外にはならぬ秋きぬとおどろくばかり袖にすゞ【しき】

同四　ねざめする夜寒の床のきりぎりすたえだえになく声もさび【しき】

同十四　いまはとてしめゆふ宿のかきもねど見るがなかなか世のならひ【しき】

風四　夕ぐれの空にうかびし山際の夕やこそ秋よりさきにすゞ【しき】

同六　夕日うつる柳の末の秋風にそよぐ外面の声もさび【しき】

同十三　人こそはいまこぬさへ思ひてはすぐるばかりなぐさめかねもかな【しき】

同　たれかしる人まつ月をいかに見るや『つれなしも行ぬ夜にかな【しき】

同十六　雲しづむ谷の軒端の夜の更ゆきて見るものおもひさび【しき】

同十七　ちるをみてさそやしかふかきのうちおもふ心にかへてうら【しき】

おほよそ上にしるしたるやうに何等の辞なくして。きるるもしきととめたるは。七代集の中に載たるを見るに。かくて玉の二首の内にも。玉葉風雅ごときのほかおほくて。其他の集にはしかなり

ただ三首なくてはあきをみて。此格のよろしからぬ事をさとるべし。撰集の歌にハ古くハすくなく集に多く見えたれど　のちや〱しきまんこなる此世といひて久しき　玉葉風雅すは
なれ件の歌どもの歌ドもしどさのまハこゝろ〱てもちぶき
つぽくべく此二つの集の歌ハえもいはずくだ〱しくいやしけなれ
なれる中に。たふをもおしそのそへざるもいとおほきてこゝまでそ
も知べし。総じて後世の人。此玉葉風雅をバ風体ありとて其
ふいひあぐる。みだりによみいづる事なれ。此二つの集のことはでくぞの
や何とかゝらぞしてき。大きくもむかぶおほきハいふぞや。て
かまはさ正さん人も。此格ゆるくしよむべからず。調べきのそぬ
歌の事深くさぐらずてにいとみだりなくそざろなる物なからし。

志

新勅 十三　おいぬとてかくしも思ひこし[志]又秋の夜の月をみる哉

風 十四　しらざりし[志]涼しさもみむさうなる人ぞ人乃見ししらるゝかも

新拾 十九　しらざりし[志]んぽゞくおいすへを身の思ひ出にしものぶらしく八

右三首上ミぞのや何等の辞なるれバ志のドゝなるぞ。ただ其の歌をあしふと知るドいかにふれどもゝなるぞ。後二首ハ多なるぞ。割ざりしをまつべき格なり

ふ

拾 十八　かきたれ[る]（ケツ）こゝろえしなる。おしさきてとも君なる人やいかるとて

新 四　人よりもちらむおもひなるが見[つる]（テキ）月をもみれたもかゞ袖ゆゑ

風 十七　よの中おもふきなでらふふなぐさ[むる]よしいく秋のなからましかバ

右三首上ミぞのや何等の辞なるれど。結びつるぞともいへるそのちゞ。格きの歌を新たにやぞかゝぬとつゞきてよろし

ぞ

六帖 あさま川東路より【ぞ】若菜はつみてそでよむさし野の原

新拾 秋 このまより風にまがひてちる雪とおもくいへど花かと【ぞ】見ゆる

後拾 秋 夜はよも涼しかるらむ山川【ぞ】波の音する也。秋来ぬやどしまた

源氏 末摘花 から衣きみがこゝろのつらければたもとはかく【ぞ】そぼちつゝのみ

拾遺 長哥 秋霧乃花野を紅おきてゆく末方人絶ぬと【ぞ】見ゆる

件のなどといへるを ぞの格なるのみぞ

続古 十二 いくそ度かねて行かせよとてまつ川人のこゝろぶかき秋風【ぞ】吹く

此歌いくそ度かといふべくきこゆれどぞといひて秋風のとまりとめてよろし

風 七 山をあるくをへだてゝきこゆるとしらば【ぞ】なかの秋のとなれち

新拾 十四 浅瀬山のちらんとおもふ【ぞ】見ぬべき物をうつまでも行まし。

此歌を万葉に本歌。三の句念社とある本あり。とまりを思ふ人もあるぞ。後葉八年ぞおもてよりそ。思ふぞとよまれたるなり。てふぞそのぞなし。又万葉今の本にあるをとかくるも誤なり。ある人だにそもしらぬと見れど。おもへてそこに訓べき古言の例なし。そもく代々の撰集に万葉よりとられしさ歌なるぞ。誤かくのごとくに誤りて。おほくくはしくわざされど。ふかくしてあるは行きをぞ。此歌をもとにてたすねへきなるべし。

新続古 十七 新潟なる木葉はつるをおそきれど秋やと山の風【ぞ】身にしむ

このまへ秋やときくといふ意にて、なほひくをあれぞぞもつくし、むかしよく八幡しげきよき様やそのまゝなへ草しらぬ風のみにしむとぞいひまかしき

や

拾 十一 きのふみし【や】見ぬ人こふるやまひとなれねひまでハやむ薬なし

同 十四 なにはの波のうちよせてこよひさへいかでか見つるとり【や】きく

後拾 九 こよひ【や】なの月見るよびをしかりまでまでて山乃ふもとなりけると

いせ物語　こゝ[や]このわがわたりのがれつゝ年月ふれどまさりがほなき　去字かく

あゝやうのこゝろ何ハあゝいふ中に右の二首ハやの結びちくのごとくこゝやこのといふ時も。やの結びをうけつゆのごとし。此の類やの結を考べし

拾遺 二条　くるゝかと誰が宿のれと[や]よの中にはまよへる人こ[や]家をあるらん

同　たちよると[や]らひ[や]かりまし＝白雲はちゞにうつろふ宿にみゆらん

此二首もやかし二つ　うちつゞくつゞ

いせ集　春の花ふるまきうめと[や]うぐひすの花よりさきに来なくつげらん　んとかトアルベシ

新八　有栖川おなじながれはかはらねど見し[や]昔の影ぞうつれぬ

新勅 夕　身を秋乃よかよやらへまをやらん月をのこ[や]ちまつとまれど

右の二首もやかしあるて何しろなし

同 十六　花よりも[や]おのが妻べと思ふ雪は雪ちりて咲くらんかな

こゝハとまりハたのがまるやと云べきをやのじおきぞへたるなり　此類の体多しよく心をつくべし

後撰 一　かすみたち雪もきえぬ[や]みよしのゝみかきが原に若菜つみてん

後拾 五　立田姫今[や]ちるとぞかへるらんあきのへ秋のいろぞまさらしき

此二首やのじあまりてわろかるべし

新後拾 十七　わしはやく何をうきよの中をすて[や]たてぬ煙なるらん

此歌やのじおきぞへたるなり。上のごとく入るゝとやあらびやましてハそぬと何るまじし

[加]

後拾 十一　まてといひし秋もなかばに成ぬるをたのめ[か]おきし露ハいかにぞ

此かのじきえてあやし。何まりあゝ。かなをさへてかのじ結をつゝかえるべくあやしきなり

[何]

續拾 十五 おとうぎを[いろふ]らすまぬ心こそはかなしと思ふ身を有しら

此いろふはいふ心ひ見ゆらしてもなげく　てふをそらくのおぼえなんある

[くさ〴〵の條]

玉 六 ほそかだき本葉をいまはのこゝろねぞあげ[く]そてもしぬぐしの風

同 十四 みやこ[を]だに春秋庭をふへまでなど雪きえぬ山路たどりをも

新後拾 五 雲ゐちかき所のあさぎども落をひて何まよ添き老の雁ざ見[に]

同 十七 一しぐれるふきしらみよしの大井の山き[つ]出らくちるを

右のあざもしぐれをかし今りとほのどみあむがごとあるを

拾 六 詠ゆ[う]だ挫てそぬ[あれ]わる山乃しづくふのくハあやせざるなん

上をゆらだといひて解るまと結べるハそのそだ。ゆうだといふぞぬまめと結ぶべし。わしぬる一筋く。上をゆきだとつそふべきを

同 十二 まがきうねふしあをぬる[くるも]むすびし挫そ今もかはる[など]

ぬるくともといふ下をかきうしくを結べきを。など結べるハあやまり也。かはるぞあらバ上をぬるらんといふべきさまなりし。これらく字し誤なるべし

金 八 [是しきを]妹あるらん見や詠痛して山のしづくを挫ぬらさん[とハ]

意しき涙と結る詠をほと　何ひうなにどもがごとあるを

後拾 十六 ちるざりぬ舞ちし中ハ紀しらえて夕暮ぞうり身に是ま[ま]とは

結句身にとまるんとハといはざればいぞ。上の見しぞりきふうあるぞ。わし見まれとハといはぞ。上を思ひぞりきといはざればうらひうし。

續千 六 ちる[ざりき]秋の声やちかきあらく船さいかぞうり霧る月をみるらん

二の句より下皆さしはかりたるを結びのうまれた。結句見しざりきといひ結うなりだ。まぐてざりきハふち声をはぐ結うれど。ぱあそハいで見しだとしてそのつべきを

同 十六 おのづから思ひひかづくとうひぞな[き]ちぎりしまくのんなうらむらば

三の句かひぞならんといはでハ。上のいでるを結びのすらだだ。よくあるぞ。すべかひぞなきといひて。二の句見ひらでしを。結句心すし猶ぞとてそらぞへべきを

拾十八　身はうきを人の情をしらずぞ。さらにいふとも[ど]ろきもかはるべき。
此ど文字を略しいやまはるべし　さて八切り也
さてそれの字にうちかひがたし

同十六　かゝぞうかまつとしる[ぞ]や郭公らちも声ちくも鳴須らむ郁
此ぞ八ぞの字略し侍りぬべし。めし八きこゆや、の俣名をも見ど。さて八故を
ざれど。郁のうなふかなりど。ぞやとひそうとみ八劣る

後拾十三　東屋のかやが下ぬれしみづならばい[ま]や月日のゆくもしらまし
此ま八さを略し侍りて
いまやあるべし

後後十四　行やらぬまぎさまどひや。みやこ恋ひし紀も泣てこひて[だ]
此ぞ八ねの字略し　いやまはるべし　ぬり
わかされど上のやの結びとの也ぞ

新後古二　花[ぞ]なほみよしわくに咲そめて世に紀なき春ぞのちく

同　かざしつるろ[ぞ]花をし桜なまで老のそがさのうらまやえける

此二首のぞ八ちとふたを
うつし侍るもの也り

狭衣　散しくへ乃まくら[も]うたてあはれ也る君なき床は秋の袖ぞ見る
此も八ぞの字略しいやまはるべしぞふ行り
ざれば也るとはづるかうかひがたし

堀川後百首　そともまなきむ乃やゝ床まようひつゝえてぞあきまし秋月はらふ[を]
此を八をを字略し侍るあるべしめしをあらばえてぞあらねとぞざれども
あきぬまでねとりやときハをとハらひがたし

○変格にはじくて不調

古十九　恋しきう方もかくしてありときけたちまちなれどもしられくち[ける]

此ちる一本には八うみく行きど
そるともよろしとハきこしぞ

後十二　まどろまぬ枕もうらそ声うちそがふうつゝにもおもひねうちの[ける]

新古　わくらはてそ眺月のふてそへどそつきちよしもへてるあちの[ける]

新拾八 こぬ人をまつ川 秋風の猶ざりしも八なれさへあやな語ぐくちる[まる]

拾六 夕されはしをるゝ子らが宿よりえゆるに詩の中にきえ[ゆる]

詞三 萩の葉にあらぬ人をすぐれものをくる秋ごとにそよとさ[ふる]

新千 いづくをかとがのなきまぬ 清や行ると宿 吹風すくへどちるくえ[ぬ]

玉十三 ぬるころいつはるこころ恨られもかくるとなきしと思ふにさそもとまれ[ぬ]

風十二 なやぶりに人をえらん玉づきふ思ふちろ乃たくいのこゝさ[ぬ]

千十三 こゝをやさしばかりうちむその中しとみぬ物かく[消]をとに[ぬ]

右のかなをにつきと等なぎる変格の例なれどもいや

しきふきこえてものぞ

一本にてにをはを写し誤れる事

あまた八代集の中に。てにをはのかぎとろし誤れる本校ある。

今こゝにかれの本どもを考へ合せて。宜しきを□の内にしるしかや

まれる方をバ。その右のかたに出してイとあらせたり。

古三 ほそきれ人まつ川 さりしあく物きバ家うちつきふ若きをうき[を] キイ

旧六 とがまるぬ年八きなきど多年れかきとかし人をおとづともせ[ぞ] 令イ

旧十一 うれをきれる人をさしまるゝ家なきや涼なころをさる人[の] ソイ なやき

旧十三 おくしぎりきば君が名立なぞ[み] キイ 夜涼くらし消人えきんうと

旧十四 くりり月れ私をしまるゝ家なれ[ぞ] ヤイ ゑふしそえてねことバあるれぞ

旧十七 難波がるおかふる玉藻をかりそめれ行方ぞぞ。家をぬりぬべしな[る] ヨイ

同十九 秋の雲に まかれ蕊乃 年をへて あぞ、なきのひよと[そ]なく セイ

此歌結句のそのかし古今集の本ニハ皆ぞと下りよぶも上りあぞそくいへはぞ。そハうしのまだ六帖一本にむとありを見ぬべし 此歌後拾遺にもまよふを

同 はるし立に友ハ人まつをる秋葉のさやぐ夜秋を[づ]むかりぬる まイ

後一 今とかぬそしるをばかへて梅花かぞ下こくに今ハざりき[る] マイ

同二 まてくとバこが今とおやき夕ばくよおおつかな[し]と山路ふして くイ

此歌寸四の句の末りじ今本ニハ皆くと下りよ 但うり六帖うりしとあるはりちるふべし

同三 風をぶふきちてぞむの前なまし心ぞうしにうつるふかう[さ] きイ

同 かぬうくふかひし六とハ落波の立とうつりで末とまれと[ろ] ハイ

同 めふよるよ[そ]天の川余を下せまくんそりひたなくただ波とるん やイ

同 秋の夜路もきとうれきだなぞくとくもてぬきふるそ思ふべうなる[ま] マイ

同 秋風のふけぞまずぶふまびし[そる]よのさとみちを思ふかのかう きそイ

此歌六ハ古今集はしきぞましぬ言せうるもこ。後拾遺一あそれとおかりふを 帖ひらんちるおどうるし同じ拾こ。朝をを今あるへの本に。まそとうるハむが とこ。さて八一首の歌そのまに。朝るにまぞとある方似見ひてまさとある 本を不用といつる説なでかなるむがころうえぞと。

同 まむとりひし給やるとぬる秋のおふたきまつ虫[ぞ]夢路るまし妃 のイ

同六 袖ふうつる月のむかりハ秋でるふこよひかりつるぬ能としつんえ[法く] つイ

同 秋らとばよふころぞみづさつてまげりみぢだと前まそりき[ろ] マイ

同七 りみぢ葉[そ]ちる木のもとにまりなとるりり秋やいづちまうしるん のイ

同九 よ形る能がしやまん哉せど下ふるすハ空くそ雲の波るなるら[め] ヘイ

同 ながらへてわらぬまでふも玉秋葉の深きハいうふ下のそれすりき[ろ] マイ

同十 よ形ふのくまろ[ぞ]そうなれ住の江乃松てさへそえまく゛ことじ乃まし そイ

同十一　ちゞのみなにかゝでこひわし彼まぞ我やなかしと人の（やとぞイ）とがむる

同十五　白川は流のいとなきみづまでよるぞ人をまつといふろ（まイ）

同十六　そかなくてたえなんとは糸なりなめくがおなくかむときらん（ぞ君ふイ）

同十七　行く人もなくなはあはせ波ともがりけが身にまつきてぞ（とイ）あらハぬ。

同　流つ瀬にしまれなみ紙みだりきんおりやせにみ神え（ぞイ）むらぬき。

同十九　かゝる衣なら川日をよそふきて人まつへをぞかられ程もこひどを（きイ）

拾二　山が川の堰程に咲る卵花またがまつさへ乃衣かもしぞ（ろイ）

同廿　こゝろもさしもぞおとふ（ひイ）浮るぎぞの身をきつくづく人ちのこゝて

同九　いまきつじまみたりくのゆきかるバ袖ありひまきとへ人とこそ見ま（んイ）

同十四　津の雪はいく田はりのいて夜かうきんむま参に（ぞイ）見えもろん

同　はのなはをとゝ白の涼くおとへ（ふイ）ぞしよれを（えイ）難波の行とくなみだぞき（しイ）

同十五　ちひさばこひもまなぼやまぼこれをきく人にしてこそとるき

後拾一　花見てぞ（えイ）身はうたてともなすゆく春ハくらはなかりしかバ

同七　おもでゆかれのなかる糸たえせでぞ（もイ）久しくよそにへつるべき。

同十一　こゝろうき人のこゝろを思ひでやなほしろきは凡に（ぞイ）なくやと（べきイ）

同廿　おもひあるこゝとゆめじと見しつまでやといふにこそ嫁られぬま（ろイ）

金一　山吹きしふきなる風をしむあらば八重まがふをぞ（やイ）ちりまざらん

同二　卯花のまなをとえしぞ咲ぬまバ雪と（ぞイ）ハ名のミかなるもあり八重

同八　よとは海乃もしくなふ行されまこ行やしく（やイ）ひとしぬいらぬこゝひ哉

同　袖をこそ見べでいる祢（やイ）いましろのゆらふのきうる日が滝ゝ那し

千一　さえぬ[やと]〈とやイ〉さらぬ山路に尋ねいる家をバ苔乃むすぶなりけり

同六　須ノの関有明の空に鳴千鳥かたぶく月ハなれもかなし[や]〈きイ〉

同十　うごきな[く]〈きイ〉猶万代ぞ頼むべきはこやの山のみねの松かげ

同十四　ちぎり[き]〈しイ〉やらぬ此よなふけし月の影を待てしやどれるべしとハ

新一　浅みどり花もひとつにかすみ[つゝ]〈つゝイ〉おぼろにみゆる春の夜の月

同七　君が代ハ久しかるべ[し]〈きイ〉わたらひや五十鈴の川の流たえせで

同八　おきそふる露とゝもに[え]〈やイ〉きえもせで涙にのみもうきしづむ哉

同十五　友まどゆくきしの角田の渡まと忘れ[ぞ思ふ]〈おとへイ〉妹がこゝろを

此歌ハ万葉四に出て下句妹がこゝろを忘れて思へやとあるを直されたるなれど
例ならんと思ふ人も有べければさてハその証

同十六　かゝる夜ハちかきかゆる春のよハいかでか雲乃いろをみるべ[き]〈くイ〉

同十七　君を恋むかふハいづ[と]〈ぬイ〉わすらぬべし大原山をまちみよかりきや

同十八　うれしげにかたらばあるよの夢路につゝにさへしかる[なく]〈てもイ〉

此なく一本にハなくとあり それもよし
てとハ此つゞきにやまはることなし

○上件の言いづれも。かゝりにちがへる本どもにては。たゞ一首のて
にをはその合ずきハ見えて。此が写しゝ。さて其の外。新勅撰より下
つゞき十三代の集どもにて。ちがへたる所ども。おほかれど。それハ
今ハ皆かゝりをちがへたるを。なほさりにへつゝよれあし
きにならんもおほかるをとぞその三字をあげたるなどハ。たがひそ
ほまるをいづれの集とも決しがたし。まづかくのごとし。

○上の。一本にてふちくれを写し侍るうたの中に出せる。古今集の秋の部に妻なき鹿のことと
いへるうたにてふきはのけ。結句のそのぐを。ぞとうけるときハ。上の語ぞよりよのどまで。鹿の
鳴声(コトバ)にて。はぐ鹿のかひを何ぞよといふこと。結るをなぞとらふ辞上より下によ(ビジ)
あるなり。さハ笑ふりなくきやう事なり。古人まかくとよみきん。古のおとしこゝろちたハ。
なぞの辞ハよのどまでへかゝりて。その下へも及ぶるなり。そのぐ結てふをぞ不調す
けりだ。ちうきことあれかひよぞなくとあるぞ。うもなくやうろうをおしうる。そのぐ
ある時そ。まぐこへのかひのといふが鹿の詞にて。なぞハそうきとがみえうる作者の詞也。